

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：32608

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770042

研究課題名(和文)「小芝居」における音楽演出の研究 近代歌舞伎の多様性をめぐって

研究課題名(英文) A study on musical direction in ko-shibai (low-class small theatres): the diversity of kabuki in modern Japan

研究代表者

土田 牧子 (Tsuchida, Makiko)

共立女子大学・文芸学部・講師

研究者番号：30466958

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：資料調査：松竹大谷図書館所蔵の杵屋花叟旧蔵付帳(音楽演出を記した演奏家の覚書)コレクションの調査・整理を行った。付帳ごとに年代・上演演目・劇場・丁数など15項目のデータベース化作業を完了した。

音楽分析：小芝居(大劇場より格下とされた大衆劇場)における上演の音楽演出の解明として、大歌舞伎(大劇場における歌舞伎)との比較、小芝居で活躍した女役者、中村歌扇の舞台の実態の解明を行った。分析により、大歌舞伎に倣いながらも、独自の音楽演出も展開する小芝居の実態が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：resource research: Investigation object is Kineya Kaso's tsukecho (Musical notes of musicians) collection in the Shochiku Otani Library. The database making work of 16 items such as age, performance plays, theaters, and even numbers for each resource has been completed.

Musical Analysis: the musical direction in ko-shibai (low-class small theatres) has been clarified from the viewpoints of; (1) comparison with o-kabuki (kabuki at the big formal theaters), (2) performances of onna-yakusha (lit. female performer) taking Nakamura Kasen as an example. From the analysis it has been clarified that ko-shibai practiced their own musical directions although they followed o-kabuki as their model.

研究分野：日本音楽史

キーワード：近代歌舞伎 音楽演出 小芝居 黒御簾音楽 陰囃子

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 小芝居という研究対象について

「小芝居」とは、近代における小劇場を指す。劇場や役者の格の点で大劇場(大歌舞伎)とは区別(差別)されたが、安価で身近な庶民の娯楽として人気を博した。

全盛期の小芝居は、劇場数や観客動員数で大歌舞伎を圧倒したにもかかわらず、従来の研究では見落とされてきたが、最近では、演劇学の視点からの研究が進んだ。そうした状況の中、本研究は音楽学の立場から小芝居の実態に迫ろうとするものである。

### (2) 「陰囃子」という研究対象について

「陰囃子」は歌舞伎の舞台進行に即して、舞台下手の黒御簾内部で演奏される劇音楽である。しかし陰囃子は、歌舞伎の実演に携わる者以外には情報が得にくい特殊な音楽であるため、歌舞伎研究の中では他の領域に比べて研究が遅れていた。応募者は、演奏家の覚書である付帳を資料として、陰囃子の解明に努めてきた。本研究では、これまでの「大歌舞伎」における陰囃子の研究を活かして、小芝居の陰囃子(音楽演出)を解明しようとするものである。

## 2. 研究の目的

### (1) 資料整理

基礎研究として、「杵屋花叟旧蔵コレクション」(以下、「花叟本」)に収められるすべての付帳をデータベース化する。本コレクションには1200冊余の付帳が収められるとされるが(杵屋花叟『喜陸抄』長唄邦叟会:1992)、いつのどの上演のものが何冊含まれるのか、具体的にはわかっていない。そのため、まず本コレクションの全貌を明らかにし、小芝居の付帳がどのくらいを占めるのか、詳細を把握するとともに、他の付帳についても今後資料として活用できるようにする。

### (2) 音楽分析

音楽分析には、の付帳を主要資料として用いるが、分析の際には以下の点に着目する。小芝居では、大歌舞伎さながらの舞台を見せただけでなく、小芝居ならではの作品や演出も上演された。また、新興演劇や映画(活動写真)の台頭に伴い、新派劇や剣劇、連鎖劇といった新しい演劇ジャンルも上演して、観客のニーズに応えたことも小芝居の特徴である。出演者も、男性の歌舞伎役者、女性の歌舞伎役者(女役者)、新興演劇の役者らが共演して、混沌とした様相を見せていた。

以上のことに着目し、松竹大谷図書館が所蔵する「杵屋花叟旧蔵付帳コレクション」を主要資料として、小芝居の陰囃子(音楽演出)の特徴を見出す。分析は、歌舞伎作品における大歌舞伎との音楽演出(陰囃子)の比較、新派劇のレパートリーにおける音楽演出、女性の歌舞伎役者(女役者)が主演する作

品の音楽演出の解明、の三つの視点から行うこととする。

## 3. 研究の方法

### (1) 資料整理

「花叟本」のデータ入力作業とデータ公開に向けた準備作業を行い、(2)および今後の研究に向けた基礎研究とする。データベースは、請求番号・外題(作品)・劇場・上演年月・俳優・場名・丁数など15項目のデータの入力により行なう。また、データベース化の作業方法は、応募者の過去の研究に倣う。

### (2) 音楽分析

分析の対象、方法、考察などは以下のとおりである。

対象： 大歌舞伎との比較  
新派劇のレパートリー  
女役者主演の作品

分析方法：応募者が過去の研究で提示した大歌舞伎における陰囃子の分析方法を適用・応用する。

専門的知識：歌舞伎については八代目杵屋巳太郎、新派については堅田喜三代の協力を得る。

考察と結論：音楽分析の結果は、応募者の過去の研究あるいは現在進行中の研究の成果と照合して最終的な結論を導く。

## 4. 研究成果

### (1) 資料整理

「花叟本」の資料整理をひとまず終えた形である。本コレクションは、大谷図書館によって年代順に袋に収納されている小芝居を中心とする付帳(235冊935作品)、年代順に並べられている小芝居を中心とする付帳(133冊578作品)、年代順に並べられている大歌舞伎を中心とする付帳(25冊85作品)、ほかに杵屋栄二師による付帳のコピー(大歌舞伎)、詞章本などが含まれた。

付帳については、形態・記載番号・上演年月・表紙記載・外題・種別・劇場名・丁数・落款印・裏表紙記載・出演俳優・場名・備考のデータをとった。

データベース化により「花叟本」は昭和初期を中心とする小芝居から大歌舞伎までの多岐にわたる音楽演出の資料として、貴重なものであることが改めて明らかになった。これらのデータを他の上演資料と校合し、正確なものとして、データ公開の準備を整える作業が必要となるが、それは今後の課題とする。

### (2) 音楽分析

大歌舞伎との比較

『三人吉三』の「大川端の場」を対象として、昭和10年前後の音楽演出の比較を行った。資料としたのは、大歌舞伎の付帳(1点)、小芝居の付帳(4点)、SPレコードの録音(5

点)である。その結果、大歌舞伎の演出は現在と共通点が目立つのに対し、小芝居の付帳やSPレコードは現在との相違点が多く、また演じる役者によりそれぞれに異なっていたことが明らかになった。つまり、昭和10年前後の『三人吉三』の音楽演出からは、演じる役者や劇場ごとに違う、ヴァラエティー豊かな音楽演出の実態が浮かび上がったということになる。大歌舞伎と小芝居のものとは明らかな系統の違いが見られ、またSPレコードに録音された音楽は、それぞれに個性溢れるものであった。

現行の定型は、六代目尾上菊五郎によって洗練され、磨かれた演出を基にしている。これを、洗練された型が残し、他は淘汰されたのだと、見ることもできる。しかし、多種多様な音楽演出に、昭和初期の歌舞伎が持っていた豊かさのようなものが感じられる。

少々乱暴な言い方をすれば、近代とは、歌舞伎が持っていたさまざまなレヴェルのヴァラエティーが、一つないし少数のものに集約されていく時代とも言える。ヴァラエティーとは、歌舞伎そのものの在り方であり、演目であり、歌舞伎役者の出自や性別や演じ方であり、いわゆる「型」と総称されるような演出面であり、そのほか、劇場、観客の楽しみ方など、ありとあらゆることである。

本研究は、音楽演出の面からそのヴァラエティーの一端を見たものである。この音楽演出からは、様々な階層の観客を大歌舞伎と小芝居とで包含し、それぞれの観客の中に、それぞれの形で歌舞伎が浸透していた時代が偲ばれると結論付けた。

詳しい分析とその結果は、伝統歌舞伎保存会編『歌舞伎に携わる演奏家名鑑』(2016年3月)に、「近代東京の歌舞伎音楽 昭和初期の黒御簾音楽にみる多様性」として発表した。

#### 新派劇のレパートリー

新派の付帳の収集と雑誌や新聞における劇評の分析を行なった。付帳については、大谷図書館の付帳整理とは別に、堅田喜三代師所蔵の昭和10年代から戦後までの104冊(付けし：中村兵蔵)を整理した。中村兵蔵は、現在の新派の音楽演出を確立した演奏家(付師)であり、大劇場での新派の実態を現すものである。大谷図書館の花叟旧蔵の付帳コレクションには、小芝居における新派の付帳を数点見ることができるため、比較することが可能であろう。付帳を使った音楽演出の具体的な分析は今後の課題としたい。

#### 女役者が主演する作品の音楽演出

女役者の中村歌扇は明治中期に11歳で女役者となり、昭和14年まで舞台に立っていた、「最後の女役者」と言われる人物である。これまでも歌扇については研究を行ってきたが、再度調査を重ねた結果、踊りの師匠である叔母も女役者として舞台に立っ

いたことなど、いくつか新しい点が明らかになった。歌扇の伯母は四代目中村虎治という中村流という江戸時代から続く舞踊の流派の家元であった。さらにこの伯母は、九女八に乞われて女役者の舞台にも立ったことのある人だということが明らかになった。初めは歌吉と名乗り、一度舞台を離れてから、また歌昇と名乗って三崎座に出ている。どちらもほんの数回なので、女役者だったとは言えず、舞台に立ったことがある、という程度だが、この伯母の経験や人脈が歌扇に大きな影響を及ぼしていることは間違いないだろう。歌扇ははじめ明治33年に歌昇を名乗って初舞台を踏んだと言われるが、この歌昇という名も伯母の名を継いだということになるだろう。なお、歌扇の姉は叔母の名前を襲って中村虎治となり、日本舞踊の中村流を受け継いだ。

こうしたことを含めて発表したのが、演劇学会大会(大阪大学2016年7月)のラウンドテーブル「女性芸能者の近代—その特殊性と普遍性—」における「女役者、中村歌扇が生きた近代—観客の視点から—」である。近代の女性芸能者について考察するものであったため、下記の点にも着目した。

歌扇自身は同時代の女優とは違う、女役者である、という気概を持ち続けていた。女役者という存在が時代遅れになっても、女役者であることに誇りを持っていたと思われる。歌扇は結婚し、穏やかな結婚生活を送っていたようである。二度ほど引退宣言をして、旅館の女将になったりもしているが、しばらくするとまた舞台に出演し始めた。必ずしも舞台に立たなくても生きていける経済基盤を持っていたように思われる歌扇が、舞台に立ち続けたのは、おそらくそれだけ歌舞伎が好きだったからであろう。興行師である養父はすでに世を去り、興行師のコマのひとつとして働かされる立場でもなく、食べていくために働かなくてはならない立場でもない歌扇は、小芝居が衰退していく中で、劇場の規模も小さくなり、共演する役者の格も下がっていてもなお、歌舞伎を演じようというモチベーションを持ち続けた。大正から昭和にかけてはもう女優が普通に女優が進出していた時代でした。昭和6年になってようやく女優9人が名題に昇進というニュースが出るが、その中に女役者としては唯一歌扇が含まれている。歌扇の周りには自ら職業を選択して女優になった人たちがたくさんいた。彼女たちは、歌扇のように十代のころからこの世界に放り込まれた人とは少し違っただろう。しかし歌扇は、自ら職業を選択した近代的な女性たちと比較的近いところにいた。自分も夫がありながら、女役者を続けていく姿勢に、歌扇の近代性があるのではないかと考えた。

音楽演出については、とくに義太夫狂言について、SPレコードの録音を主要資料として分析を行った。分析の対象としたのは、『伽

『羅先代萩』の「御殿」の段、『恋女房染分手綱』の「重の井子別れ」の段における、義太夫節（竹本）のテキストとセリフである。分析では、それぞれの作品について、歌扇の録音と、現行の大歌舞伎とを比較し、表にして示した。また併せて、歌扇と同時代の大歌舞伎、人形浄瑠璃のテキストも参考にしながら、歌扇の舞台の実態に迫った。その結果明らかになったのは、以下の点である。

・『先代萩』『恋女房染分手綱』ともに現行歌舞伎と比べると大幅に省略されている。ただし、これはSPレコード録音という条件の上での制限によるものと思われる。

・省略部分を除けば、現行と共通する箇所が比較的多く、とりわけ竹本のテキストは現行と一致する箇所が多い。

・『先代萩』については、人形浄瑠璃のテキストと一致する箇所が多いが目立つ。

・『先代萩』の政岡のクドキなどにおける竹本とセリフの掛合には、現行や当時の大歌舞伎の役者による録音との違いが見られた。この結果のみから断言することはできないが、このあたりに大歌舞伎と小芝居の伝承の違いが見られると言えるかもしれない。

・小芝居に独特の演出、大きな入れ事などは見られず、大歌舞伎に倣ったオーソドックスな演出を主としていたようである。これは歌扇に見られる特徴として、他の点からも証明されている。小芝居の場合、劇場によってはかなり奇抜な演出をみせる場合もあったらしいが、歌扇の舞台は概してオーソドックスである。

・『恋女房染分手綱』の幕切の演出に上方歌舞伎の影響を思わせるものがあった。歌扇は若い頃に上方に滞在していたことがあり、劇評でもたびたび「上方風」を指摘されている。この『恋女房染分手綱』の重の井の演技が、当時の上方の演出に倣ったものかどうかはもう少し検証が必要であるが、歌扇と上方の関連性は注目に値する。

歌扇が小芝居で演じた芝居に奇抜な演出が少ないことについては、劇評その他の記録で指摘したことと一致しているが、相違点については、人形浄瑠璃のテキストと共通点が多いこと、上方の演出との関連が見られることなど、今回の分析で新たに明らかになったことが多い。ただ、この二作品だけでは確証は得られないため、ひきつづきの調査を今後の課題としたい。

本研究は、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターの『伝統音楽研究』13号（2016年6月）に「SPレコードに遺された小芝居の実態をめぐり一考察 中村歌扇の録音における義太夫節（竹本）とセリフを例に」と題して発表した。

またこのほか、Conference of Meeting of East Asia Study Group (MEA) in International Committee of Traditional Music (ICTM)（奈良教育大学 2014年8月）

でも、「The Musical Direction in Kabuki Performances by Onna-yakusha」と題して、音楽演出の実態を、大歌舞伎との共通点と相違点とに分けて紹介した。現存資料から知ることのできる歌扇の舞台の実態は、昭和初期の歌舞伎の一側面として重要である。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計3件)

土田牧子「SPレコードに遺された小芝居の実態をめぐり一考察 中村歌扇の録音における義太夫節（竹本）とセリフを例に」京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター『伝統音楽研究』13号、査読有、2016年6月、37-55頁

土田牧子「六合新三郎旧蔵 歌舞伎陰囃子付帳一覽(四)」『歌舞伎 研究と批評』54号、査読有、2015年7月、63-101頁

土田牧子「六合新三郎旧蔵 歌舞伎陰囃子付帳一覽(三)」『歌舞伎 研究と批評』53号、査読有、2015年3月、89-130頁

〔学会発表〕(計2件)

横田洋・澤井万七美・土田牧子・中尾薫（司会）パネル「女性芸能者の近代-その特殊性と普遍性-」

土田牧子「女役者、中村歌扇が生きた近代観客の視点から」

2016年度日本演劇学会大会、大阪大学（大阪府・大阪市）2016年7月2日

Makiko TSUCHIDA, “The Musical Direction in Kabuki Performances by Onna-yakusha” Conference of Meeting of East Asia Study Group (MEA) in International Committee of Traditional Music (ICTM), 奈良教育大学（奈良県・奈良市）2014年8月23日

〔図書〕(計1件)

（共著）

伝統歌舞伎保存会編『歌舞伎に携わる演奏家名鑑』、2016年3月（総ページ数323頁）

土田牧子「近代東京の歌舞伎音楽 昭和初期の黒御簾音楽にみる多様性」（52-62頁）

土田牧子・前島美保「参考文献一覽」（267-315頁）

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等 該当なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

土田 牧子 (TSUCHIDA, Makiko)  
共立女子大学・文芸学部・専任講師  
研究者番号：30466958

### (2) 研究分担者 該当なし

( )  
研究者番号：

### (3) 連携研究者 該当なし

( )  
研究者番号：

### (4) 研究協力者 該当なし

( )